

も く じ

\*文化庁に注文する\*

分散より多極集中化が必要  
文化行政長期懇委員 山崎正和…2

「国立美術庫」の発想  
京都国立近代美術館長 河北倫明…4

能と日本文化  
文化財保護審議会専門委員 川瀬一馬…6

昭和52年度文化庁予算概算要求まとまる ……7  
文化功労者選考審査会委員、文化勲章受章者選考  
委員決まる ……7

流人文化私考  
高知大学講師 平尾道雄…8

帰らざる日  
(社)日本歌手協会理事長 林伊佐緒…9

フランス文化庁長官になった  
フランソワーズ・ジルーの横顔  
「夕刊フジ」学芸部 山口昌子…10

著作権ニュース ……12

東アジア、太平洋著作権セミナーに出席して  
文化庁文化部著作権課長 小山忠男 ……13

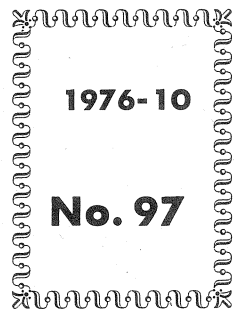
文化活動グループ紹介  
学習の結果をボランティア活動に……真野敦子…14

我が町、我が村の文化行政  
縄文時代の貝塚整備など 千葉県市川市……15

博物館・美術館ニュース  
旧近衛師団司令部が工芸館に……16  
特別展 日本の武器・武具(東京国立博物館) ……17  
第10回現代美術選抜展 ……17  
特別展 日本の肖像(京都国立博物館) ……18  
山種美術館の開館10周年記念展……18

文化庁ニュース……20

地方ニュース……24



表紙：大官大寺出土 隅木の飾金具  
(奈良国立文化財研究所発掘調査)

題字デザイン・桑山弥三郎

# 「国立美術館」の発想



河北倫明

(京都国立近代美術館長)

「国立美術館」といった名前の施設ができるかどうかは知らない。しかし、そういう意味の倉庫だけの施設、いわゆる「館のない美術館」を既存の博物館、美術館のほかに設けて、これによって豊富な民間コレクションとの融合調和を計り、とくに未だ実力に乏しい全国の国立の博物館、美術館のために役立てたらどうか、というのは年来の私の考えである。

そういう点から見ると、東京国立博物館をはじめ、既存の国立施設はもちろぬ建物もコレクションも相当に整備されているが、国立の中でもまだ二、三の施設は未だとても十分とはいえないものがあり、そして近年続々と誕生している公立のそれになると、展示場としては目を見張るようなものでも、コレクションや展示企画の面で青息吐息の感じのものが少なくない。

そこで、一つ考えられることは、これらピンチにきているコレクションを一定の条件で公立美術館が收容するという行き方だ。

これも世間周知のところだが、近年における各地公立美術館建設の勢いはめざましく、あちこちの自治体、各府県や大都市が続々と美術館の設立拡充に向かい、もう手をつけていないところはほとんどない状況となっている。しかもまた、もう一つ周知のことは、これら各地の公立美術館が、少数をのぞいて貧弱なコレクションしか持たず、せつかくの公費をかけた施設が泣いている例が多いという事実である。現に建設進行中の各地の公立美術館にしても、話がコレクションのことに及ぶと、大きい顔ができるところはほとんどないが実情だ。以前と比べて購入費がやや増額される傾向はあっても、期待される内容と比べれば九牛の一毛にすぎない。

しかし、いうまでもないが、公立美術館は、それ以外の条件をみたくことは根本的に困難とは思えない。まず、場所や建築は公的に選択され、運営費、学芸員の問題、普及活動などについても最悪の場合でも最低基準を越える程度とはなっている。もちろん不満な点が多い現状を打破すべきことは当然としても、何と云っても最大の泣きどころ

は美術館、博物館にとって、ありすぎて困るということのないものである。多種多様な良いものが豊富に揃えば揃うほど、展示内容は深味を増し、立体性を加え、どんな企画にも応ずることができる。美術館にとってはこのコレクションの土台を整えることが最上の課題なので、実状は数多いそれぞれの館がそれぞれのコレクションを持つというも持ち得ないからこそ、借用に頼らざるを得ない羽目となっている。この借用に多くの限界があるとなれば、おのずから企画は貧弱化し、内容の低下は避けられない。そういう点でいえば、かりに固有のコレクションがない場合でも、そこに借用可能なコレクションさえ充実していれば、それでもよいということになる。大てい美術館、博物館が運営に当たって、多くのコレクターとふだんから親しい関係になければ種々の困難を生ずる例はよくあること

はコレクションの弱さである。この泣きどころを解決するのが今日の公立美術館最大の課題といつてよい。

となると、現代の私的コレクションの危機を避けるのが救済役であり、公立美術館がなうのが妥当であり、また公立美術館の泣きどころを解決するならば手近な道は、私的コレクションの協力参加ということになってくる。要するに公立美術館と私的コレクションを適切に結合する方法を見つけることが、今日いちばん時宜にかなった美術文化振興策といつても過言ではなからう。

もちろん、この両者を結合させるためには一定の条件が必要である。一方が他方を強制するというのでなく、まずコレクター側の協力を土台として、美術館側はその協力に対する答え方を積極的に工夫しなければならぬ。何々記念室といった寄贈受け入れの発想もあり得ようし、作品ごとに特別のラベルをつけることもあり得よう。またそのため一定程度の特別購入費を予算化することも自治体側で当然考えてみるべき措置である。何をやるのかかわらない予算でなく、協力的なコレクションをやるためということになれば、種々の消化法がありうるはずである。が、要は、私的コレクションの性格と内容を大切に、これと公立美術館とを温かく結びつける工夫をやつて

ろだ。こういうことも「国立美術館」といった施設をつくることによって、一挙に解決してはどうかというわけである。

こういう考えの第一段階は、昭和四十九年三月十四日の朝日新聞に私が次のような意見を發表したところから始まった。参考までに当時の所説を再録してみると、「私的コレクションと公立美術館の役割——死蔵され広く鑑賞の道を」という見出しで、中味は次のとおりである。

「近來の経済界の情勢で、これまで急速に伸びてきた美術収集の勢いが止まり、中には早くも解体の危機をほらむ私的コレクションもあるという話を聞いた。

今でも海外からの美術品流入が無くなくなったわけではないが、昨年前期ごろまでの入り方は、日本ではかつて経験したことのない激しさで、例のアナリ、ルソーの場合に象徴されるように、相当の作品が続々と我が国に持ちこまれた。これを受け入れるコレクターの側も以前とちがって、多彩であり、数も多く、その中には私立美術館をめざす収集家もかなり含まれたかのようである。ところが、今日はそうした傾向に歯どめがかかる気配となった。コレクションが一定以上に大きくなれば、どうしても美術館を作つて姿

みることだ。立派な美術コレクションが死蔵されることも、散逸させられることも、どちらも私たちににはありがたくない。ひろく万人によって鑑賞され楽しめることこそ、コレクションの本望であろう。今はそうなるための具体策を進めるべき時だと思ふ。」

以上の私の提案は、当時かなりな手ごたえがあり、あちこちで共鳴していただいたが、さて実際問題になると、うまく条件が整うことが容易でなかった。大ざっぱに整理すると、鎌倉市における氏家コレクションの場合など数件は、この考え方で大すじをまめていただいたが、多くの場合、提供したいコレクションのスケールと、受け入れ側の公立美術館のスケールがうまく噛みあう例が少なかった。例えば、大コレクションのある都市の美術館は、すでに創立時代を遠く離れて運営が硬ばつてしまつており、新興の美術館の近くでは適切なコレクションがなく、地方美術館の場合は、どうしても土地と無縁のコレクションをそう簡単に入れるわけにいかない事情が伏在するからである。

そんなことから、私のこの意見は、大すじでは変化しなかったにしても、苦しい私的コレクションと、内容貧弱な美術館とを結びつけるのに、中間に適切な媒体を設けることがいっそう効

をあらわすほかないが、美術館を作ることはそう簡単ではない。ただ建物をこしらえて並べれば済むというものではないからである。

第一によい場所と土地を取るといふ問題があり、それは建築も決しておざなりであつて、なれず、さて開館となると、専門の学芸員が必要となり、運営費もばかにならない。また年間の開館日数も一定以上を要求されるし、附随してカタログその他の刊行物も出して行かなければならない。これらの条件を満足にみたせないようでは、どんなコレクションも生きて来ないので、やがて立ち枯れの状態となり、解体に追いこまれる実例は、これまでに何度か世間で見てきたところである。

つまり、よほど周到な準備と覚悟がなければ、買ひ集めた美術品を生かして良い美術館とすることは難しい。良い美術館とすることができなければ、結局一定程度以上のコレクションは死蔵ということになるから、最近の情勢の中で、せつかくの私的コレクションがあちこちでピンチにきているのは容易に理解できるところである。

では、そうしたせつかくのコレクションを情勢のままむきむきと雲散霧消させてよいか。これはだれが考えてもあまりに無残で、何か名案はないかというところになる。

果的で具体的なやり方だという考えに移つてきた。つまり冒頭に述べた「国立美術館」の案である。自らは展示場をもたない保管と調査だけの美術施設を国の手で行つくり、これを東京と関西ぐらゐの二箇所にかけて、維持することだけで精一杯といった立派な私的コレクションを一定の条件で受け入れる。そうして、ここには管理保存、調査研究の専門家をおいて、民間各優秀コレクションを良好に保管する体制をつくり、さらに中味についての十分な調査をして、研究や展示のために有効に活用ができるようにする。

要するに、この案は、これまで非常に熱意と情熱をもつて収集に當つてきたコレクターの気持とその実績を無にしないようにしながら、これを文化の土台作り役立つよう公共の立場で集結し、整備しようというものである。すでに財団法人となつていてるコレクションの中にも、今日の厳しい情勢に當つて、こうした国の手による管理保存を待望する向きがあり、さらに細かい所を詰めて、ぜひそうした新しい国の機関が生まれるようにしたいものである。こういう施設の発足を切望している人は、私以外にも沢山あるが、ひろく多数の美術館、博物館関係者にもきつと支持して貰えると思つている。

編集後記

○山崎正和教授(阪大・美学)の「分散より多極集中化が必要」は、長期態での注目を集めた御発言を再度語っていただいたもの。朝日夕刊、アメリカカ日記を拝見したのは、つい先頃のことだが、八月末には、ヨーロッパへと御多忙。先生の顔写真、中央公論社から拝借した。多謝。

○フランスの文化庁長官にシルー女史就任。ハ・二八付サンケイ朝日がシルー女史の文化庁長官への横滑りを報じていた。閣外相とはいえ、この人は新聞週刊誌のとりあげるべき人と考える。そこで、本誌では大手町に山口昌子さんを訪ね、掲載許可をいただき御紹介する次第。

○平尾道雄さんは、昭和四十九年春、勲四等瑞宝章を授けられた歴史家。高知在任の氏のお名前を編集子が知ったのは、司馬遼太郎「龍馬がゆく」によってであった。文化庁提供「美をもとめて」は、「故郷忘れ難く候」の沈寿宮氏による「薩摩の陶芸」をとりあげた。このところ司馬文学の恩恵を蒙っている。

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(03)2681-2414(代表)

「文化庁月報」 十月号

(通巻第九十七号)

昭和51年10月25日印刷・発行

編集文化庁

〒東京都千代田区霞が関3丁目2番2号  
発行所 株式会社 きょうせい  
本社 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
営業所 千代田区新富町西五軒町52番地  
電話(03)2681-2414(代表)  
振替口座 東京 九一六二番  
印刷所 (株)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)  
年間購読料 一、八〇〇円